

■ 授業者より

- 「見える化」して振り返ることで、話し合いを展開する方略の効果を実感して高め、よりよく話し合うことを目指している。
- 「話すこと」、「聞くこと」の課題は、話し合うことがゴール化していることや、話型や活動に指導の中心が向かうことなど、「話し合う力」への理解不足。
- 議論を推進する中心的な役割を果たす、「議論の筋道をつくる働き掛け」、「協同性を高める働き掛け」などへの指導不足。
- 議論展開能力（北川）を基に話し合う力の育成を目指す。
- 議論展開能力は大きく5つに分けられており、小学校高学年として、「全体に問い掛ける働き掛け」、「途中で意見を整理したりまとめたりする働き掛け」に重点をおくべき（北川）。
- 児童の実態として、協同性を高める働き掛けのうち全員の参加を促す視点は約4割の児童ができていない。また、議論の筋道をつくる働き掛けができていないと回答した児童が多い。
- モデル動画（教師による話し合いモデル1とモデル2を比較）から、児童がよい話し合いだと答えたモデル2について、どのような「こつ」が必要か考えていく形で単元を進めた。
- 話し合いモデル2には、北川が提唱した議論展開能力の上位5つ、下位12を散りばめた形であった。
- 音声言語の振り返りに有効な文字化資料としてUDトークを活用した。
- 本時は、話し合いのこつの有無のみで採点をしてしまうことが問題だと考えたため、1、2の部分を変更した。話し合いのこつや話型が成果、UDトーク活用までの道のりなどが課題。

■ 指導助言

上川教育局義務教育指導班 主任指導主事 時田 和樹 様

【国語科の授業づくり】

- ①言葉による見方、考え方を働かせ、言語活動を通して資質・能力を育成するという姿勢が見える授業だった。
- ②ICTの特性を活かした授業だった。現場の課題として、端末の利用は広がったが、端末をどう使うのかについては、学校間、個人間で大きな差がある。実践を重ねて精度を高めていくことが今後の課題となっている昨今において、提案性のある実践だった。
- ③語り合いから
 - ・方略を獲得するまでの手立てについて、「獲得」と「使う」ことは異なる。方略を身に付けているものの、話し合いなどの中で、適用できているのかどうかは異なる。児童が、国語科において、言語能力を身に付けて、いつ活用するのかわからないため、国語科としては獲得することを目的としてもよかったかもしれない。
 - ・よい話し合いとは何か。一概に言いにくい。方略の獲得と話し合いの質は別物になる。点数化により、教科としてねらうものは異なる。
 - ・言語能力の育成の要が国語科である。
 - ・話し合いについて、指導要領に基づいて考えると、この話し合いは自分にとってどうだったのかについて考えるとよかった。
 - ・客観的に自分の話し合いを文字化された資料から捉えることなどを積み重ねると、全国学力学習状況調査の話し合いの問題などでの正答率も上がるのではないかと。

■ 研究協議（主なものを抜粋）

- 教師の話し方により、安心して学べる環境を整えている。計画を立てることが大切だと感じた。
- なかなか発言できない児童にとっての、今回の学びはどうすべきだと考えているか。こつが分かることを目的としているのであれば、発言できなくても、理解はしていると考えられる。理解させるだけにとどめるつもりなのか、発言させたいのか。→どのグループにも、なかなか発言できない児童がいる。周りの児童の関わりによって話し合いに参加できそうな場面もあったが、考えがまとまらず、発言につながらないこともあった。また、観察グループの児童の支援により、発言につながった場面もあった。発言が望ましいのはもちろんだが、UDトークにより可視化されたものを振り返ったり、こつの効果を捉えることを目標としていたので、その部分を中心に見取り、評価したい。
- 前段を変更したことがよかった。国語の学習で培ってきたことが児童の知識となり身に付いている様子が見られた。こつを意識はしているが、意識し過ぎず、児童は自分の言葉で語ることができていた。解決しなくてはならない意識があるからこそ、国語だけに捉われない様子が、実感を大切にす本当の問題解決となっていた。国語科の時間を使って、現実世界での問題を解決するという流れがよかった。このような活動が他教科でも大切だと考えるが、他教科・他領域での話し合いにおいて、国語科として考えていることがあれば教えて欲しい。
- 他教科・他領域での活用について具体的に考えているわけではないが、こつカードを学級に掲示する工夫により、日常のわずかな話し合いにおいてもこつを利用できている場面を価値付けてあげられると考える。国語科だけのものにしたくない。
- 素直で生き生き、主体的に活動する姿、共感する心がとてもよい。UDトークは文字化している部分が良いが、顔を見て話す場面が少ない。オンライン授業のようになっているように見えた。どう考えているか。
- 目の前の児童に言葉を届けるよりも、画面の文字を通して聞こうとしたり、マイクに話そうとしたりする様子が見られ、話し合いを隔てる感覚があった。しかし、今回は、文字化した資料のよさとして機器を活用した。UDコネクの活用など本時では断念している部分もあり、機能活用までの困難さがあった。日常で活用している端末で使えない機能であるという状況もあり、端末を選んでしまうことが、課題として考えている。UDトークを使ったのは今回が初めてであった。
- 本校ICT担当として、他にも代替できる機能があると考えられる。目的に応じてアプリを使い分けられる。
- 話す、聞くの学習として、本単元はICTを中心とした学習だったが、ノートの活用はどう考えているのか。
- 今回はICTを活用している。紙のノートは、積み上げたものが見えにくい場合もある（ノートが新調される、学年が変わるなど）。ICTの方が有効な場面もあると考えている。
- 話し合いがまとまらない、広がらないと思っていた児童もいたが、新しい視点も生まれ話し合いが広がっていたように思えた。
- UDトークの可能性を学べた。発言が消えていくことの欠点について、UDトークの文字を読むことを通じて捉えていた。録音の再生よりも文字化資料により、全体像が見え、考えを深めた。
- 発話されたことのテキスト化は、低学年でも有効だと感じた。